地方創生カレッジ
―大学生ボランティアによる日本（鎌倉）文化伝承プロジェクトの実践―

小泉 裕子（短期大学部初等教育学科・教授）・松田 広則（児童学科・教授）
飯田 篤司（教育学科・教授）・柴村 抄織（教育学科・教授）
杉山 勇人（短期大学部初等教育学科・准教授）

１．本研究の背景と目的

この研究は、2019年 4 月から2022年 3 月までの 3 年間に渡る大学生ボランティアによる鎌倉市『放課後かまくらっ子』の活動支援を通した「地方創生カレッジ」のアクションリサーチである。

鎌倉市における放課後児童健全育成事業は、近年『放課後かまくらっ子』という名称に変更し、学童保育とアフタースクールを融合した児童健全育成を実施している。

『放課後かまくらっ子』では、日常的な専門の支援員による児童健全育成以外に、大学生等の地域を代表とする外部ボランティアの参画による児童健全育成の新たな効果が期待されている。

本研究は、『地方創生カレッジ－大学生ボランティアによる日本（鎌倉）文化伝承プロジェクトの実践－』に関する研究としてスタートし、大学生ボランティアによる児童健全育成事業への参画効果の実態を明らかにするものである。

鎌倉女子大学は、2019年11月に鎌倉市と「鎌倉市放課後かまくらっ子における地方創生プロジェクトによる連携及び協力に関する協定書」を締結し、本来なら2020年 4 月から 7 月までの期間に本プロジェクトは実施される予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大の下、実施期間の変更を余儀なくされ、実際は2020年 8 月から12月の期間中に、『日本（鎌倉）文化伝承プロジェクト』のアクションリサーチとして実施した。

アクションリサーチの実施に伴い、ボランティアの主体である学生が、「日本（鎌倉）文化伝承プロジェクト」を計画し、準備し、実践する一連の PDCA サイクルの中で、①参加に「至った動機」を始めとする事前意識、②プロジェクト準備期の意識、③プロジェクト実施直後の意識、④プロジェクト終了後の総合的自己評価に関する意識の変容について質問紙調査を元に、大学生ボランティアの参画が児童健全育成事業に果たす効果や役割について明らかにする。今年度はその最終報告として、これら横断的質問紙調査結果から得られた本プロジェクトの効果を報告していく。

２．横断的質問紙調査から得られた本プロジェクトの効果

（１）学生ボランティアの募集手続き

「鎌倉文化伝承プロジェクト」の実施は、当初2020年の 4 月にスタートする予定であったが、新型コロナウイルス感染症が拡大する中、大学授業の開始が大幅に遅れると共に、全ての授業がオンラインでの実施となったため、学生ボランティアによるプロジェクトメンバーを募る方法は困難を極めた。学生へのボランティア参加の周知は、ポスター等の掲

示物による情報提示が一般的である。オンライン授業への移行は、学生のみならず、教員にとっても活用実績が乏しい中での新たな挑戦であった。

オンラインによる学生の情報周知は限定的にならざるを得ず、研究メンバー（5人：小泉、松田、飯田、柴村、杉山）の担当するZoom授業やZoomゼミナールでの口頭周知で実施し、任意の参加を募ったところ、当初24名の学生のエントリーがあった。

（2）質問紙調査の方法

第1回の事前意識調査から第4回のプロジェクト終了時「総合的自己評価」調査は、Google Formsを利用したオンライン調査によるものである。

アンケートの記入はオンライン上であるため、学生自身による記入期間はそれぞれ幅を持って設定している。また、5つのプロジェクトは、実際の当該会場でのプロジェクト進行状況が異なるため、記入の時期もそれぞれ異なっていることが特徴である。そのため、各回の記入状況にばらつきが生じている。

- 第1回（事前）調査：データ数24名
- 第2回プロジェクト準備期の意識：データ数17名
- 第3回プロジェクト実施直後の意識：データ数11名
- 第4回プロジェクト終了後の総合的自己評価：データ数22名

※参加者全員に交通費を支給しているため、最終的に参加した学生名簿を作成したところ、全体で27名の参加が明らかになっている。

（3）第1回（事前）調査結果から窺えるボランティア学生の傾向

登録当初の学生内訳は、教育学科3年（1）、教育学科2年（5）、教育学科1年（6）、児童学科4年（2）、児童学科3年（3）、児童学科2年（1）、初等教育学科1年（6）の合計24名である。

第1回アンケート調査からは、1年生の参加が12名と全体の半数を占める中、教育や保育ボランティアの経験（無し）が47%、実習経験無し54%という実態を把握した。

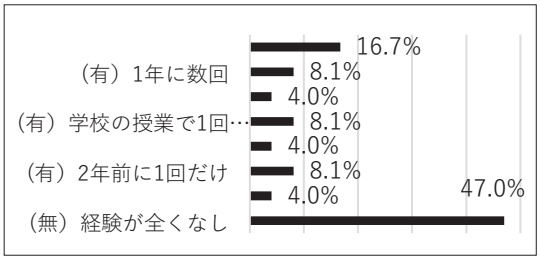

図1　ボランティア経験の有無

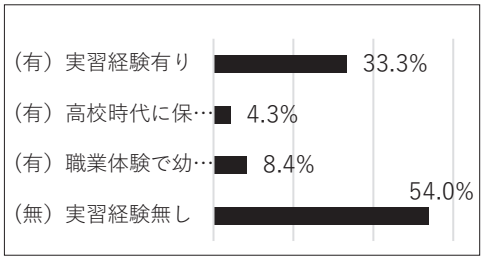

図2　実習経験の有無

またこの「プロジェクトに参加した理由」項目では、平均値が高い順に「ボランティアをやってみたいと思ったから」(4.4)、「学童保育について関心があったから」(4.1)、「地域の子どもの活動に関心があったから」(4.1)、「学童保育のプログラムに関心があるから」(4.0)、「教育職・保育職に就きたいから」(4.0）であった。一方で平均値が低いものは、

「鎌倉市に住んでいるから」（1.6）、「将来学童保育の指導員になりたいから」（1.9）、「大学の仲間に誘われたから」（2.5）、「地方創生に関心があるから」（2.8）であった。

「参加する際の希望条件」項目では、「プログラムは子どもの満足度を重視したい」（4.4）、「準備する充分な時間が欲しい」（4.1）という結果が得られた。

「参加するにあたり習得したい知識や技能」項目では全項目において、平均値が高い傾向にある。「子どもの発達に関する知識と理解」（4.5）、「コミュニケーション能力の向上」（4.4）、「子どもの評価や理解に関する知識と技術」（4.3）、「小学生の学習を指導する方法技術」（4.2）、「ティームで学童保育を営む知識や技術」（4.2）が高い傾向にあった。
一方、「参加するにあたって不安な要素」項目は、他の項目に比べ総じて平均値は低い。「自分の学童に関する保育技術への不安」（3.7）、「大学の授業がありボランティアに参加できないかもしれない不安」（3.6）がやや高い不安傾向が見られた。

以上の結果から、プロジェクトにエントリーを果たした学生は、地域の学童保育への関心が高いだけではなく、参加するなら「子どもの満足度を重視する」という傾向が顕著であり、質の高いプロジェクトを実践したいという意気込みが窺える。

そのために習得したい知識や技術の内容は、子どもの満足度を満たす実践のため広範囲に及ぶものである。プロジェクト参加への動機や熱意の高さが窺える中、ボランティア等の経験不足による知識や技術への戸惑い・不安が散見されるのは、教職や保育職を目指す学生の真摯な姿勢の表れであると思われる。

第1回目アンケートの自由記述には、「鎌倉文化伝承プロジェクト」の参加にあたり次のような記述がある。ボランティアに参加することの意義、鎌倉（地域）の文化を知ることへの意義、地方創生への意識を実感している記述として特記しておく。（表1）

表1

（1年生Ａ）私はこのようなボランティアに参加することが初めてなので、子どもたちと有意義な時間が過ごせるよう先生方や仲間たちと協力をして、頑張っていきたいです。 よろしくお願いします。
（1年生Ｂ）私は大学生活の中で、ボランティアに励もうと考えていたため、自分でもSNSなどで調べてみましたが、何から始めていいかわからなかったため、大学でこのように企画していただいたのはありがたいです。至らないこともあると思いますが、将来教職に就くために自分の経験の幅を広げられたらと思います。
（2年生）学生と子どもが鎌倉のことを楽しく知ることができる活動にできたらいいなと考えています。鎌倉の大学に通っているのにも関わらず、鎌倉のことをよく知ることができていないと思うので、子どもとの関わりを経験しつつ、鎌倉のことを知ることができる活動になると期待しています。

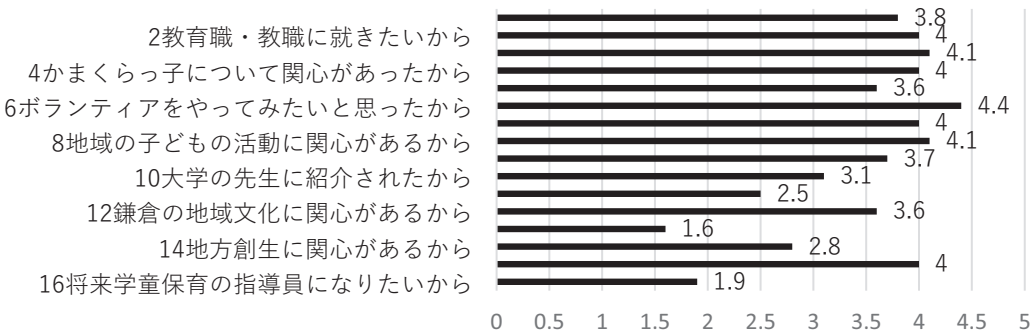

図 3　鎌倉文化伝承プログラムに参加した理由

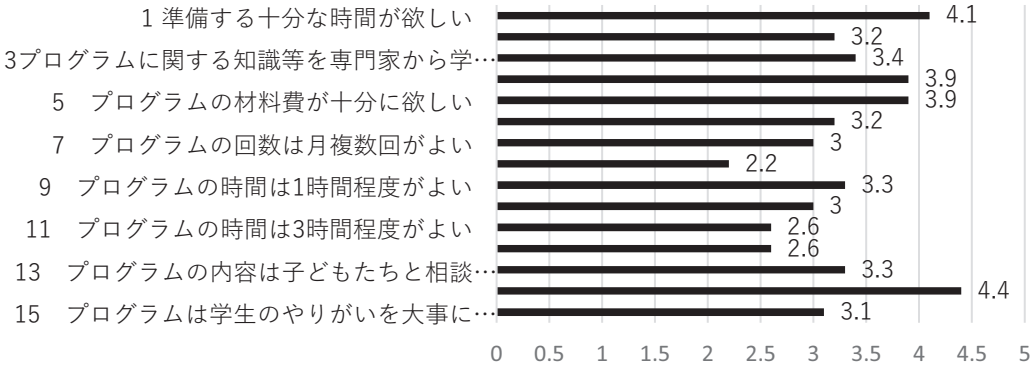

図 4　鎌倉文化伝承プログラムに参加する際の希望条件

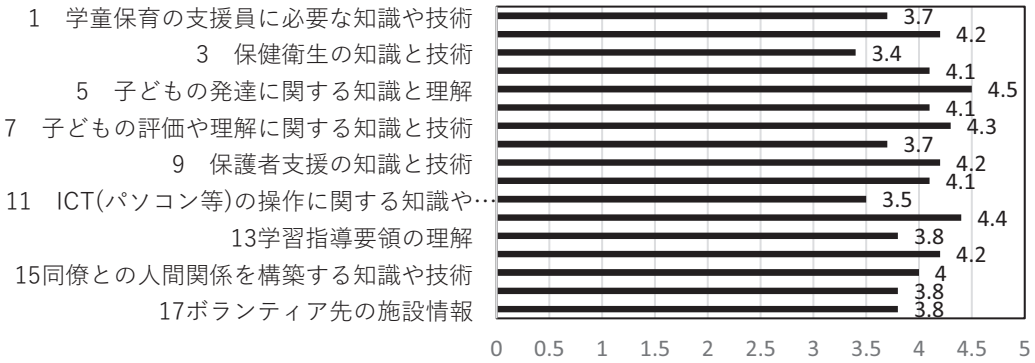

図 5　参加するにあたり習得したい知識や技能

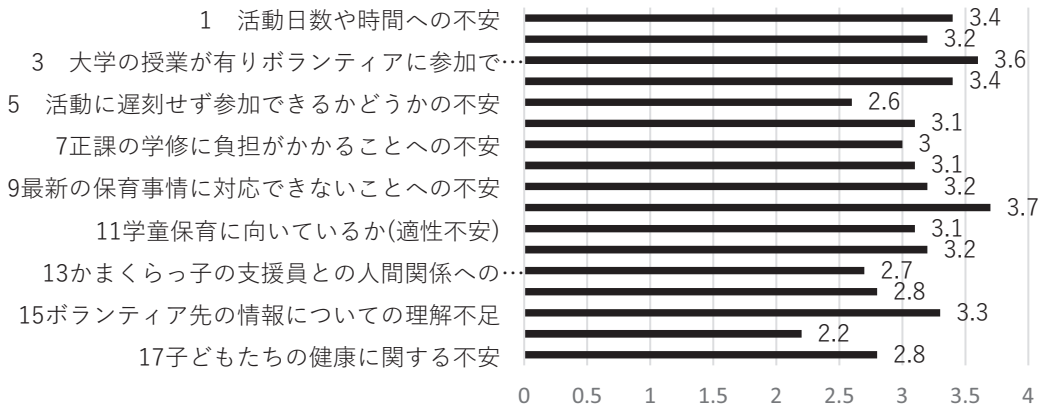

図6　参加するにあたっての不安な要素

（4）大学教員によるボランティア育成講座の実施

第1回（事前）調査結果から、学生のボランティア及び実習経験の乏しさが窺えたことから、大学教員研究メンバー（小泉、松田、飯田、柴村、杉山）により、「ボランティア育成講座」を開催し、学生主体のプロジェクトを後方から支援する取り組みを行った。

実施されるプロジェクトの質的充実を図るために、ボランティアの主体である学生達の期待やモチベーションの高さを維持し不安に対する相談助言をはじめ、学生指導には鎌倉女子大学授業支援システム“manaba course”を活用し、オンラインによる情報提供や相談支援等を行った。「ボランティア育成講座」は、7月29日を皮切りに、全体説明会と5つのプロジェクト分科会を適時開催するなど、プロジェクト実施直前に至るまで学生の状況に応じて支援した。

（5）大学生ボランティアによる「プロジェクト」の内容報告

大学生ボランティアによる日本文化（※後に通称「鎌倉文化」と呼称）伝承プロジェクトの実践は、当初One Team構成の単一プロジェクト（柴村・杉山チーム「日本文化伝承（鎌倉文化を子どもに伝えよう）」として計画していたが、コロナ禍においてプロジェクトの内容改善を余儀なくされ、「かまくらすごろくで地域を学ぶ！遊ぶ！繋がる！」をテーマとした活動に拡大することとなった。

オンラインを活用するプロジェクト（小泉・松田・飯田チーム「デジタルかまくらすごろく」）を追加し、合計5つの「かまくらっ子」を会場として実施することとなった。

先稿では、柴村・杉山チーム「日本文化伝承（鎌倉文化を子どもに伝えよう）」及び小泉・松田・飯田チーム「デジタルかまくらすごろく」の実践について中間報告をしたため、本稿では紙面の関係上割愛する。2020年度中間報告参照）

（6）第2回プロジェクト準備期の意識から窺える傾向

学生がグループに分かれプロジェクトを立案する準備期に、第2回の調査を実施した。

5つのプロジェクトは、施設毎に当該支援員（責任者）達と打ち合わせを重ね、実施日を決定する。そのため第2回調査の記入時期も学生自身に委ねられており、データ数は当

初より減少し17名（77%）に留まっている。

準備期においては、「子ども主体の活動」（4.7）、「身体を動かす健康的な活動」（4.3）への期待が高く、「放課後の子どもの活動が具体的にイメージできている」（4.0）と肯定的な傾向が伺えた。

「鎌倉文化伝承プロジェクト」の内容に対する意識では、「鎌倉の歴史を教える自信」（2.3）は決して高くないが、学生自身が「鎌倉文化・歴史に対する興味」（4.6）を持って臨む姿勢が窺える。また、本プロジェクトの Basic Contents である「子どもにとってすごろく遊びは楽しい活動」（5.0）への関心は極めて高いことが分かった。

一方、放課後かまくらっ子の支援員やボランティアの役割意識項目では、「子どもの活動の様子を見守る役割」（4.6）、「子どもの自由意思を尊重するべき人」（4.5）、「保護者の仕事と子育ての両立を支援する人」（4.3）に対する意識が高い傾向にあった。

子どもに関わる姿勢やイメージが、所謂学校の教師のそれとは異なり、子どもを尊重し寄り添う姿勢、保護者の子育て支援に繋がる児童健全育成の役割であることに理解を深める様子が窺える。教育的責任を担う教員や保育者を目指す学生にとって、このボランティア経験を通し、子どもと接する姿勢への新たな気づきは、注目に値するところである。

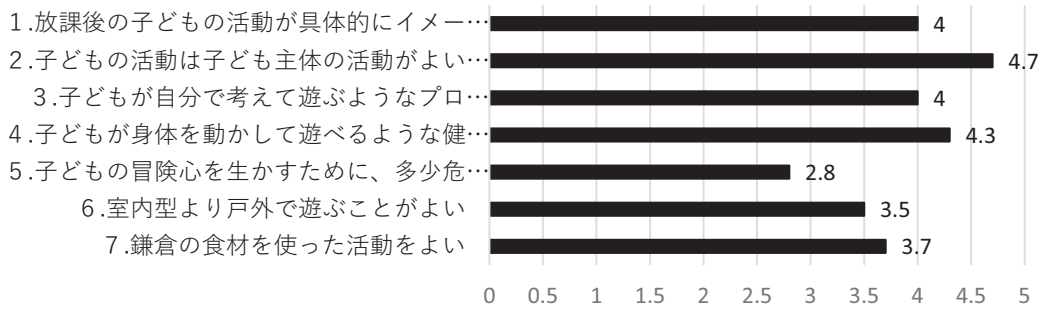

図7　プロジェクトを計画するにあたって

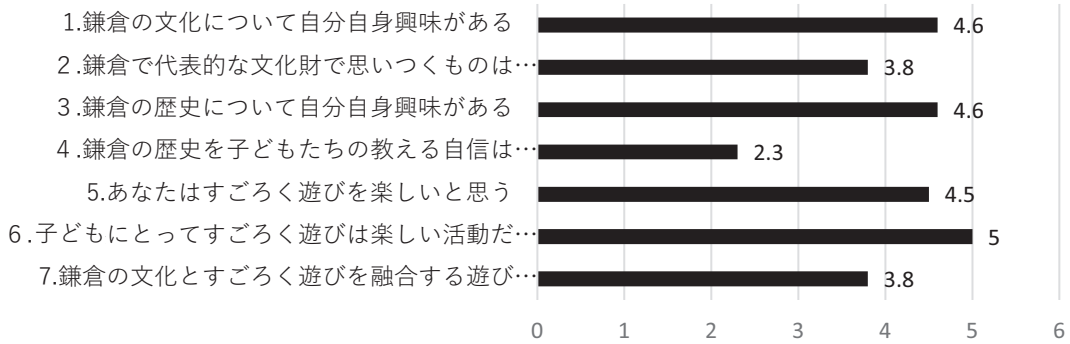

図8　鎌倉文化伝承プロジェクトについて

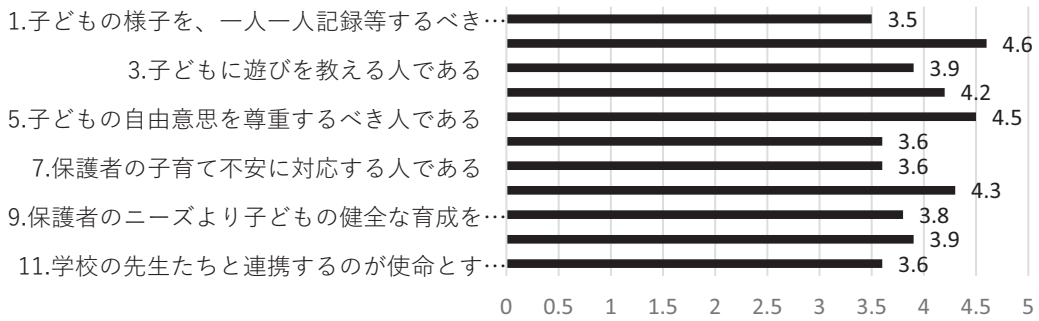

図９　放課後かまくらっ子の支援員やボランティアの役割について

（７）第３回プロジェクト実施直後の意識から窺える傾向

第３回の調査は、プロジェクトを実施した後の自省としての意味を持つ調査である。

各プロジェクトの実施日や回数も多様であり、記入の時期も個人の裁量に任されているため、データ数は11名（50％）に留まっている。

調査結果からは、総じて自己評価が高い傾向にあることが分かった。

「ボランティア先の子どもと親しくなった」（m4.6）、「子どもの様子が理解できた」（m4.3）、「子ども達に応じた活動支援が出来た」（m4.1）、「子ども達の放課後に相応しい活動の支援が出来た」（m4.1）からは、プロジェクトに関わった自らの「支援力」の達成感を得ている様子が窺える。「スタッフと交流できた」（m4.4）、「スタッフの役割が理解できた」（m4.3）からは、プロジェクトに参加し現場スタッフとの交流を通し、その職務・役割に対する理解が深まったことが窺える。さらに「ボランティアの経験が自分のためになった」（m4.6）、「プロジェクトに参加した満足度や達成感」（m4.3）が充分に得られたことは、学生自身の大きな成果であったことは注目に値する。学生自身が主体的に関わる地域創生型のプロジェクトに参画した結果、子どもとの出会い・繋がりから得られた様々なコンピテンシー、スタッフとの出会い・繋がりから得られたコンピテンシー等、肯定的な意識（気づき）を獲得したのであり、この研究の成果が明らかになったと言えよう。

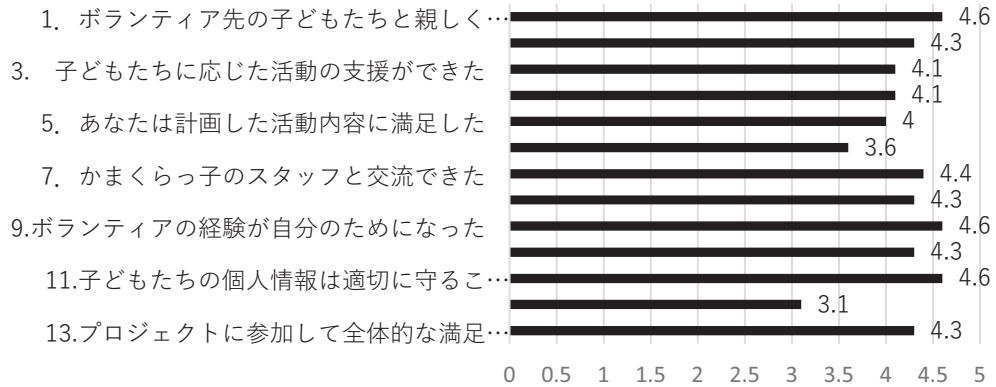

図10　プロジェクトに参加した自己評価

表 2　プロジェクトに参加して良かった（m：4.7）

子供たちと触れ合えたこと
保育実習とはまた違う小学生との触れ合いによって新たな学びや気づきを得たことやプロジェクトを通じて学年や学科の垣根をこえて交流できたこと。さらに、個人的に表立ってみんなを引っ張る立場につくことが初めてであるため、非常にいい経験ができていると感じた。
想像以上に子どもたちはなんでも出来るしアイデアがあるので楽しい活動になりそうだと思いました。またいろいろな子どもがいるのでどのような接し方をしたら良いのか勉強になります。
実際に子どもたちと関わることができ、子どもたちや放課後支援の様子を知ることができました。
子どもたちが楽しかったといって喜んでくれたこと。
学童での子どもと学校での子どもの雰囲気で違ったものが見れた。
子どもたちが進んですごろくに挑戦してくれたので、作って説明した甲斐がありました。
身近に小学生がいないため関わる機会がなかったが関われることができたから。
学校とは違った子ども達の一面を知ることが出来たことと、一緒にスゴロクで遊ぶことによって自身の学びに繋がった。
子供たちのことを知れた
子どもたちとのつながりが持てたこと

（8）第 4 回プロジェクト終了後の総合的自己評価と横断的調査結果の考察

図11からは第 1 回（事前）アンケート時から第 4 回（終了時）アンケートの結果から、プロジェクトスタート時の24名は、終了時までほとんどの学生（1 名以外）が継続的に参加していた実態が窺える。またプロジェクトが進行する中、活動の評判を聞き、4 名の学生が追加参加を果たしている実態も浮かび上がってきた。

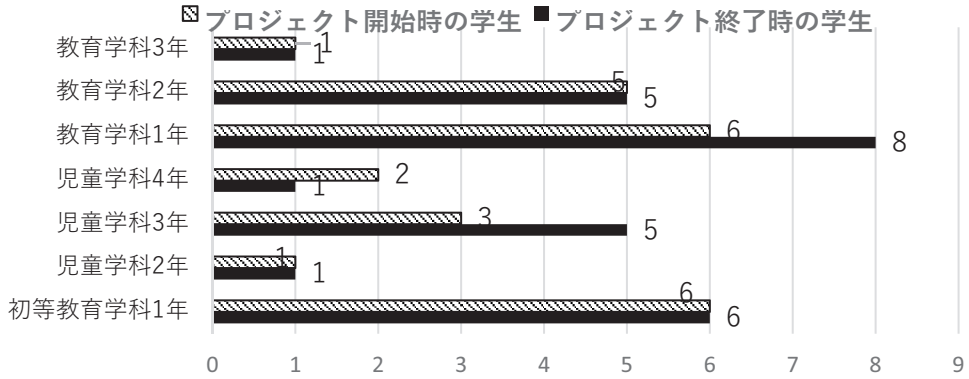

図11　参加学生のプロフィール（開始→終了）変化

学生ボランティアとして参加したプロジェクトは、延べ84回の参加実績で有り、一人の学生が平均して3.2回の活動実績を重ねていたことが分かった。

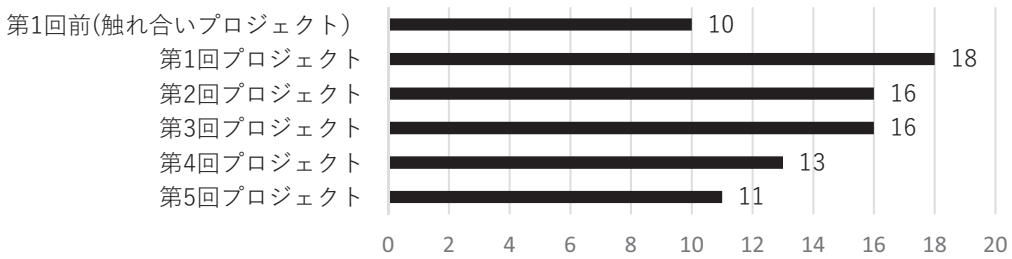

図12　参加したプロジェクト実績（人数）延べ84回

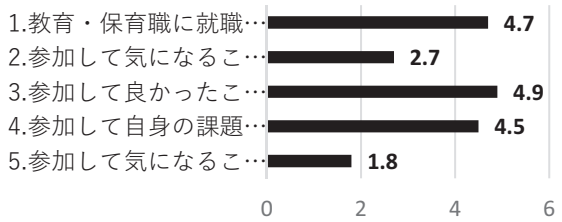

図13　第 4 回調査（総合的自己評価）

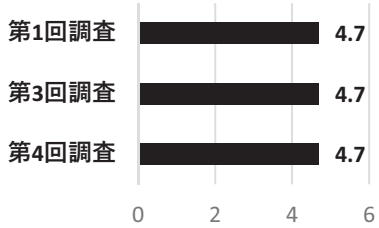

図14　保育・教職に就きたいと思う

第 4 回調査（総合的自己評価）の結果から、「保育職・教職に就職したい」（m4.7）という（belief）信念が生成されたことが明らかになった。

「プロジェクトに参加して良かったこと」への自己評価得点は m4.9と、全項目中最も高い値を獲得している。その具体的な内容について21名の学生が言及しており、その中の18人から「子どもと触れ合う喜びや、直接関わって子どものことを理解できた実感・喜び」がコメントされていることは大変特徴的である。また「支援員との出会い（ 3 名）」や「鎌倉文化や歴史との出会い（ 2 名）」に言及している学生が散見された。

最後にこの研究の総合的な成果について、質問項目「放課後かまくらっ子「鎌倉文化伝承プロジェクト」に参加した結果貴方自身にどの様な変化があったか」から得られた結果を元に考察していく。

記述された文章を意味のある句点で切り、文の意味についてカテゴリー分類をした。

カテゴリーには①子どもを導く力、②自己の成長（積極性）、③鎌倉文化の魅力、④ボランティア活動参加への姿勢、⑤教職・保育職への思い、⑥その他、の 6 分類とした。

得られた意味のある文章は30件で、そのうちカテゴリー①子どもを導く力に関する記述は11件（36.7%）、②自己の成長（積極性等）に関する記述は 5 件（16.7%）、③鎌倉文化の魅力に関する記述は 6 件（20%）、④ボランティア活動参加への姿勢に関する記述は 4 件（13.3%）、⑤教職・保育職への思いは 3 件（10%）、⑥その他 1 件（3.3%）という結果が得られた。

第 1 回調査から第 4 回調査に至るまで、学生ボランティアがこのプロジェクトに継続的に参画した中で、教職や保育職に関する専門性の向上に繋がるモチベーションの獲得は極めて大きな成果である。地域の子ども達や支援員との出会いや繋がりから得られた自己肯定感、地域支援ボランティに参加する意義の獲得、そして今まで意識に上がらなかった鎌倉文化への親しみの向上等、『地方創生カレッジ－大学生ボランティアによる日本（鎌倉）文化伝承プロジェクトの実践－』だからこそ得られたコンピテンシーである。

我々研究スタッフ、参画した学生ボランティア、鎌倉市放課後かまくらっ子に集う子どもや支援員らが「出会い・繋がり・自ら育つ」というテーマで集結した「地方創生型」のアクションリサーチとして、その役割は実証できたのではないだろうか。

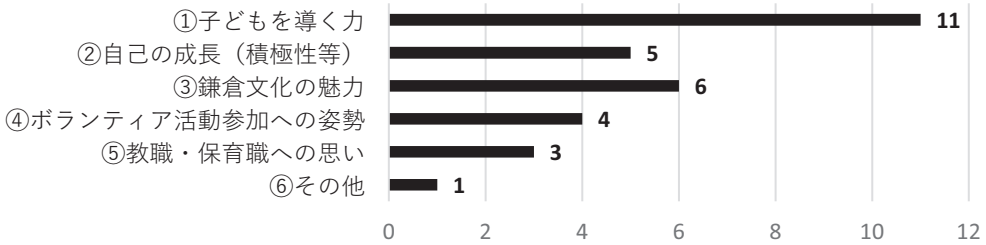

図15 「学生自身に起った変化」に関する記述数

表 3　学生自身に起った変化（自由記述）

①子どもたちをまとめる力が以前より身についた
②発言を躊躇しなくなったり、自分が率先してプロジェクトを盛り上げようと活動に対して積極性が増し、気持ちの面での変化が大きかった。
③また、鎌倉市の新たな魅力に気づき、これまで、鎌倉といえば、鎌倉駅周辺のイメージが強かったが、徒歩圏内も散策していきたいという気持ちが芽生えた。
④もっといろんなボランティア活動を行いたいと思った。
①子どもが楽しそうにしている姿を見て、子どもが楽しむことができる活動、一生懸命取り組むことができる活動を考えることはとても大切なことだという認識を持った。
また、現在コロナ禍にあり、現場に出るのは難しいと考えていた。 ①しかし、実際の子どもたちと関わって、子どもが今夢中になっていることや興味のあることを知ることができた。④今の状況でもできる限りのことをするべき、現場に出るようにするべきだと考えるようになった。
⑤今までは大きな目標として教師になると思っていましたが、実際に子どもと触れ合うと心の底から教師になりたいと思えるようになりました。
③鎌倉について知らないことが多く、教えるというよりも子どもたちと一緒に学ぶ活動になりました。
④また、このように数回にわたるプロジェクトのボランティアへの参加は初めてだったので、計画や準備、その都度の反省など学びになることが多くありました。
①子どもたちへどのように関わったらよいか見当もついていないようなスタートでしたが、手探りながらも子どもの必要とする手助けを考えながら活動に臨めたと思います。
⑤子供たちと共に学び合える職に就きたいと、より一層思えることができた。
①子どもたちの接し方が最初は分からなかったけれど少しは分かるようになった。
①プロジェクトを通して、子ども達と触れ合う機会が多くありました。その中で子どもへ接し方や関わり方など様々なことを経験する事が出来ました。それを今後の学びに活かしたいと思います。
②私は元々あまり前に立って喋ることが得意では無く、今まで子どもと関わる機会もあまりなかったので、活動が始まる前はとても不安だったのですが、事前の下見の時から子ども達が積極的に遊びに混ぜてくれたり、話しかけてくれたので、私も子ども達に少しでもすごろくを楽しんでもらえるように、活動の説明を班にする際は大きな声でわかりやすく伝えられるようにするなど、人前に立って喋るということに対しての恥ずかしさや怖いという気持ちが小さくなりました。
①また、活動中の援助としてどのような声掛けをすればよいかを常に考えながら行っていたので、子どもに対する言葉かけの援助に対する考え方が深まりました。
①活動を行う時にどうしたら子どもが楽しめるのか、分かりやすくなるのかを考えるようになった。 また、子どもの反応を考えて計画を立てることが大切だと改めて気づいた。
②予想していたより学生が主体となって進めたので、初めての経験で不安が多く、力不足なところばかりだったが、一つのことをやり遂げるという達成感を感じ嬉しかった。 ④実際に子どもと活動して子どもから学ぶこと、子どもに助けられることもたくさんあった。そのため、今後も積極的にボランティアなどに参加して子どもと関わる機会を増やしていきたいと思う。
③鎌倉についての知識を得られたこと。
②自分にとって本当にやりたいことについて再確認することができました。
①私は「学童」って聞くと、共働きの子供が行く施設というイメージが強かったが、このプロジェクトを通してイメージが変わり、学童というのは放課後でも小学生は沢山の経験を積み、学んでいける場であると考えが変化した。
③鎌倉についての知識が増えたこと。 ⑤教育職に就きたいという思いが強くなったこと。
③自分自身が鎌倉のことを身近に感じることが出来たり、子どもたちから鎌倉のいいところを聞けたので良かったです。今の子どもの考え方を感じることが出来ました。
③鎌倉について知識を深めたいという気持ちが増しました。 ④子どもたちと一緒に何か目標を持って活動することの楽しさを感じ、また機会があれば参加したいと思いました。
①「だいたい」で活動するのではなく、しっかりと事前準備を行う必要があると感じた。
②小学生目線で物事を考えるきっかけになったので今後の学びにも活かしていきたいと思った。
①放課後の子供たちについてもっと知りたいと思った。